資料 1-2

第２回　琉球文化継承・振興検討部会　議事要旨

日　時：令和２年 10 月 23 日（金）　９時３２分～11 時５６分
場　所：沖縄県立図書館　３階ホール
出席者：波照間 永吉部会長、崎山 律子部会長代理、石原 守次郎委員、
嘉数 道彦委員、鈴木 修司委員、平良 美恵子委員

基本施策　４　文化財等の保全、復元、収集

◆ 首里城復元までの間、博美などで琉球王朝に関する美術工芸品等の展示会を開催したり、県外の美術館等で保管している琉球王国の美術工芸品等を現地で公開していただく働きかけも重要。そうすることで、職人が直に目にすることができ、当時の技術を理解することで技の継承にもつながる。

基本施策　５　伝統技術の活用と継承

◆ 織物で言えば、首里城が復元されるまで、という視点で技術者の育成を考えた時には、すでに従事している人に、特化しないと難しい。

基本施策　７　歴史の継承と資産としての活用

◆ 普及という面からは鑑賞機会を提供するのに加えて、触れるという位置づけも大事であり、教育の現場とも連携する必要がある。
授業の中で組踊を鑑賞する、伝統工芸品に触れるなど、子どもたちが親しみをもてるような仕組みが必要。

基本施策　８　琉球文化のルネサンス

◆ 伝統芸能を発信する環境は整ってきているが、全体的な課題として演者が身につける物への配慮がまだ足りない。首里城では実物の染め織りを身につけて質の高い芸能を発信していくことで、鑑賞者も琉球文化をより強く感じることができる。このためには、演者の側と工芸分野との連携が必要。

◆ 琉球文化のルネサンスを考えるとき３つのポイントがある。１つは「オープン」。次に「多様性」。３つめに「継続性」。新しい文化を創造するには文化を担当している人だけでなく、IT 業界など異業種と交流することも必要であり、文化に関しては時間がかかるため、長いスパンで物事を見て、方針と計画を出していく必要がある。

◆ 文化は絶えず伝統と革新というものが揺れ動いている中で発想されている。アカデミズム、政策的にもほぼ保全するための政策。そこで職人が食べていくための産業振興が生まれ、ポピュラリティーが確立されたときにマーケット市場が生まれてくる。琉球文化のルネサンスを政策的に、あるいはマーケティングとして捉える評価軸を備えて行く必要があるのではないか。

その他

◆ 琉球文化のルネサンスとはある時代を回帰することではない。様々な歴史の荒波を乗り越え、独自の文化や手仕事が沖縄に残っているのはなぜなのか、ここにヒントがあるような気がする。

◆ 首里城は政治と祈りの中心であったが、以前の首里城には「祈り」への配慮が足りなかったのではないか。目に見えない心の文化を首里城の再建に向けて、県民と一緒に作って行くことが大切。

◆ ルネサンスとは庶民の力、バイタリティが王朝文化と一緒になって興っていく。琉球ルネサンスの主体は県民一人一人であるということを強調するような方向性を持って基本計画を策定すべき。